●モノグラフ 小学生ナウ

子どもの経済感覚

Vol.2-4

1982.(株)福武書店 教育研究所/加藤智禧・賀川雅子
船橋市立高根台第一小学校教諭 新井 誠・東京学芸大学助教授 深谷和子

目次

特集 豊かな時代のしつけ ―― 2

調査レポート 子どもの経済感覚 ―― 5

要約と提言 ―― 6

1．我が家の経済水準をどう思うか ―― 8

- ●我が家は豊かか貧乏か …… 8
- ●我が家の貯金額について …… 10
- ●自分の貯金は …… 11

2．父親の経済力をどう見ているか ―― 12

- ●景気との関わり …… 12
- ●もし父親が失業したら …… 13
- ●では母親は …… 14
- ●困った時に助けてくれる人は …… 15

3．将来の経済生活 ―― 17

- ●どんな職業につきたいか …… 17
- ●我が家の先ゆき …… 18
- ●将来自分の作る家庭は …… 19
- ●まとめにかえて …… 20

シリーズ 子ども考現学(2) 家事手伝い ―― 21

資料1・調査票見本 ―― 28

資料2・学年・性別集計表 ―― 32

資料3・職業分類 ―― 34

特集 豊かな時代のしつけ

――これでよいのだろうか――

深谷和子
（東京学芸大学助教授）

海外旅行をする人の数がまた最近一段と増えたと言われる。われわれが日本を離れて、一番感ずるのは、外国の人びとの暮らしの貧富の差の大きさではないだろうか。

開発途上国と言われる国々ではなおさらそうである。学校へも行けないでゴロゴロしていたり、観光客相手にタバコや花を売っている子どもたちがいるかと思うと、広い土地を車で何時間も走っても「これはまだ○○さんの土地です」などとガイドが説明したりして、外国の金持ちとは、ケタはずれに凄いものだと感心してしまう。

しかし、こうした貧富の差が、単に着る物とか食物とか、住む家とかの差になって現われているだけなら、まだがまんもしよう。それはただ一時的なもの、外見的なものに過ぎないのだから。ところが、世界の多くの国々では、それがもっと根深く、貧しい人びとの将来をも含めた決定的な部分にまで及んでしまうのだ。それが端的に現れているのが〝コトバ〟である。

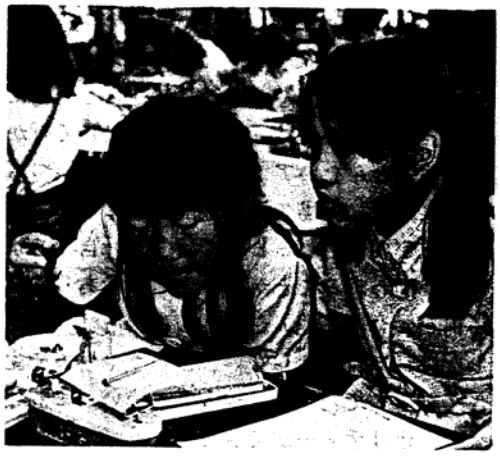
日本に住んでいると、日本が単一民族でひとつの〝コトバ〟を話す国だ、ということのありがたみがピンとこない。日本人ならだれでも日本語を話す。日本人でありながら日本語が話せないため、まともな職業につけないなどということはめったにない。その点ではすべての人は平等である。

しかし多くの国々では、多くの民族が入り混って住み、それぞれ違った言語を話している。その国によって、特定の〝コトバ〟がきちんと話せなければ、よい職業にはつけない。

たとえばフィリピンへ行ったとしよう。こうした国では、なかなかよい職場がない。たくさんの観光客が利用し、政財界の要人が出入りする一流ホテルなどは、現地の若い人びとには、あこがれの職場の1つだろう。なにしろマニラの小学校の校長先生のサラリーが、3年前に4,000円なのに、私たちの泊ったAホテルは、ツインで一泊10,000円もしたのだから。現地の若い人びとには、夢の国のようなものであるに違いない。

しかしここに〝コトバ〟の問題がある。ホテルのフロントマンをはじめ、多くの従業員たちは、なまりはあっても、英語を話すことが必要条件である。現地のコトバはタガログ語。これしか話せなければ、一生よい仕事にはつけないと言ってもよい。運よくホテルに就職できても、客と話さずにすむ肉体労働しか与えられない。事実ホテルのメイドさんたちは、非常に英語の通じにくい人びとだった。

日本ではホテルのフロントマンとメイドさんとの違いは、〝コトバ〟の差ではない。オーバーに言ったらその人の趣味の違いで仕事を選ぶようなものである。むろんその仕事につくための学歴や訓練はそれぞれに必要である。しかしそのために学校に入ったり訓練を受けるかどうかは、その人の生き方の選択の一部であって、たまたま貧しく生まれて教育の機会がなかったため、日本語が使えず、一生肉



体労働者にしかなれない、などということはありえない。

また〝コトバ〟の学習には臨界期のようなものがあって、子ども時代かせいぜい青年期の入口までにマスターしなければ、後になってからでは、格調のある美しい〝コトバ〟は話せない。その意味で、よほど才能がある人以外は、子ども時代に〝コトバ〟の教育を受けられなかったら、職業人として必要な話し方をマスターできないだろう。たとえば先ほどの例でタガログ語を話し、英語を学ぶ機会を与えられずに育ってしまった貧しい若者は、ふと気がつくと〝コトバ〟のハンディのため、自分の一生がごく狭く希望のないものに限定されてしまっている。こんな残酷なことがあるだろうか。

そう考えてくると、我が日本ぐらい、人びとの間に差のない民族は少ないかも知れない。〝コトバ〟はむろん同じであるし、同じ黒い髪と黒い目を持っていることが、どんなにありがたいことか。

しかしこの、人と人とが同質的だということは、また別の問題を生み出しているようにも思える。たとえばアメリカの自我心理学での重要な概念である「アイデンティティ」という語は、日本人にはきわめてわかりにくい。これは「自分らしさ」とか「自分の正体」のような意味だが、「個」を大切にし、「他人と違った自分」を何かにつけて前面に押し出して行かなければならないアメリカとは逆に、いつも他人に同調し、場の調和を乱さずにやって行くことが要求される日本では、この「自分の正体」が問われることが少ないからであろう。

何かにつけて他人がやれば自分も、他人がしなければ自分もしない、というやり方で生きているので、逆に「他人との違い」に弱いパーソナリティーができてしまう。

たとえば日本の公立小学校の昼食は、学校給食で、お弁当持参は許されない。ところがヨーロッパやアメリカでは、給食でもお弁当でも、その日によって、どちらも本人が選択できるようになっている。しかし日本でそれが許されないのは、「一律」にするのが、つまり子どもたちに、他人との「差」を感じさせないようにするのが、教育的配慮だと考える人びとが多いのであろう。

しかし人間は基本的には「個」であって、他人との違いの中に生活している。他人の生き方に流されず自分の生き方を保つ、という生き方が、程度の差こそあれ、どの社会でも要求されているはずなのだ。とすると、たとえば貧しい子どもに、時には貧しさを堂々と受けとめ、決してその貧しさに打ちひしがれずに生きて行くことを教えることが、人間の一生には必ず何回かやってくるはずの「逆境」に耐えそれを切りぬけて行く力を育てることにもなると思うのだ。その意味で今の日本の教育は、あまりに他人と差のないことを強調しすぎて、逆境や他人との違いに耐えられない「もやしっ子」を育てている気もする。史上かつてないほどの豊かな時代が到来したと言われる今日だが、この先どんな時代がめぐって来てもビクともせずに生きて行ける人間を育てるために、子どものしつけや教育のあり方を、再考してみる必要があるように思う。

調査レポート

子どもの経済感覚

新井　誠（船橋市立高根台第一小学校教諭）
深谷　和子（東京学芸大学助教授）

何かにつけて人びとの口から「豊かな社会」という言葉が語られる現代である。

最近おとなの間には、きわめて広範囲にいわゆる中流意識が拡がっていることが、世論調査の度にくり返し指摘されている。しかしこのような中流意識が、いわば砂上の楼閣にも似たものであることを、われわれおとなはどこか心の片隅で知っている。交通事故で働き手を失った家庭が、翌日からどういう経過をたどるか。また幸運にもそのようなアクシデントに出合わなかったとしても、年をとってからわれわれが、一体子どもの世話にならずにやって行けるのか。思いめぐらして見れば、われわれの中流意識が決して根拠のあるものではなく、一皮むけばその下には経済的な不安定感が根を張っているのは、確かなように思われる。

しかし子どもたちはどうなのか。最近の何十年間の社会の変化を目のあたりにしてきたおとなと違って、いわゆる豊かな社会に生まれ育った子どもたちは、自分の家庭の経済状態をどう捉え、どんな経済感覚を持って生活しているのだろうか。そしてその感覚は子どものパーソナリティー形成に、どんな影響を与えると予想されるのだろうか。この点に接近してみることが本調査レポートのねらいである。

サンプル数　（人）

学年＼性	男子	女子	計
4年	363	301	664
5年	339	306	645
6年	306	351	657
計	1,008	958	1,966

調査概要

対象●東京都・千葉県・宮城県の小学4・5・6年生 計1,966名
時期●昭和56年11月
方法●学校通しによる質問紙調査

子どもの経済感覚

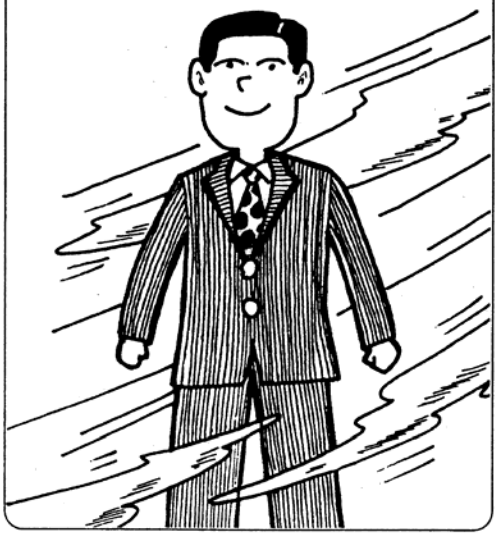
要約

① ふつうが7割

子どもたちの、わが家の経済水準の捉え方は、ふつうより豊か22%、ふつう70%、ふつうより貧しい7%となっていて、ふつう意識が拡がっている。（図2）

② 42%

42%の子どもは、父親の仕事は景気に左右されないと思っている。

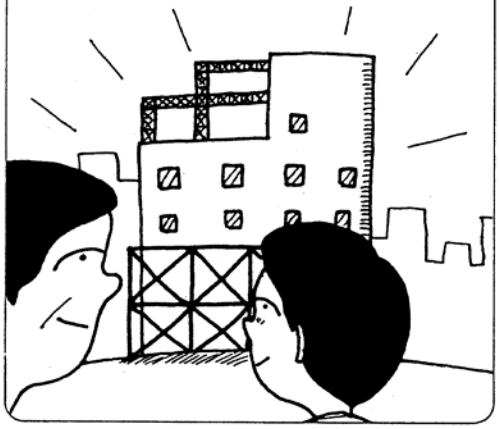


③ 52%

52%の子どもは、父親が失業しても、すぐ前と同じか前より給料のよい職場に再就職できると思っている。

④ 36%

36%の子どもは、父親の店や工場（自営の場合）が火事で焼けても、すぐ再建できると考えている。

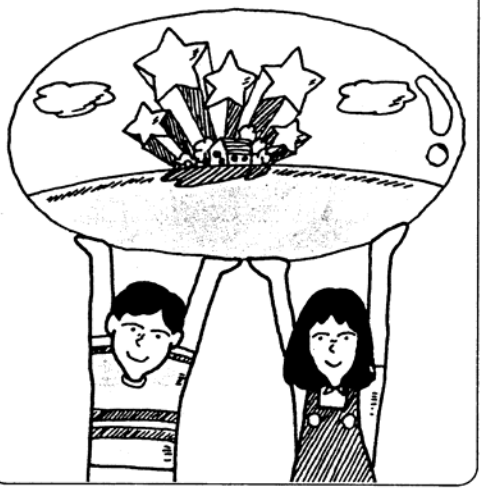


5 今より金持ち1/3

自分が18歳になった頃、自分の家が今より金持ちになっていると予想している子どもは、男子で39%、女子で32%。(図18)

6 将来作る家庭

将来自分の作る家庭が、今より金持ちだと予想している子どもは、男子で39%、女子で35%。(図20)



提言

子どもたちに、何かの形で、現実の厳しさ、労働の大変さ、金銭の重みを教えることが豊かな社会の子育てに、ぜひ必要なことではなかろうか。

1．我が家の経済水準をどう思うか

我が家は豊かか貧乏か

まず図1に、子どもたちの両親の職業を示した。父親の方は、子どもたちの経済感覚を扱う調査としては、もっとつっこんだ資料がほしかったが、昨今の事情ではこの程度にたずねるのが限度だった。母親については、何らかの形で職業を持っている人びとが多いの

図1・両親の職業

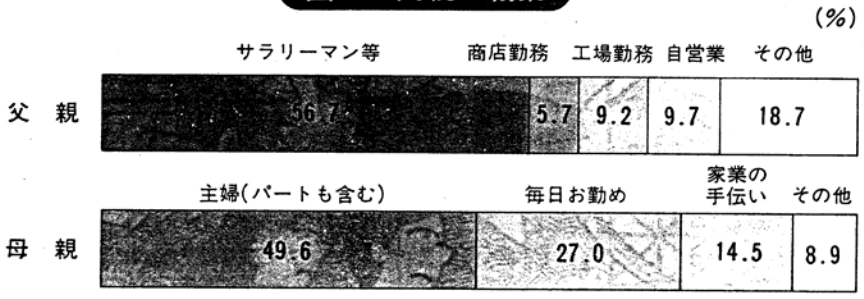
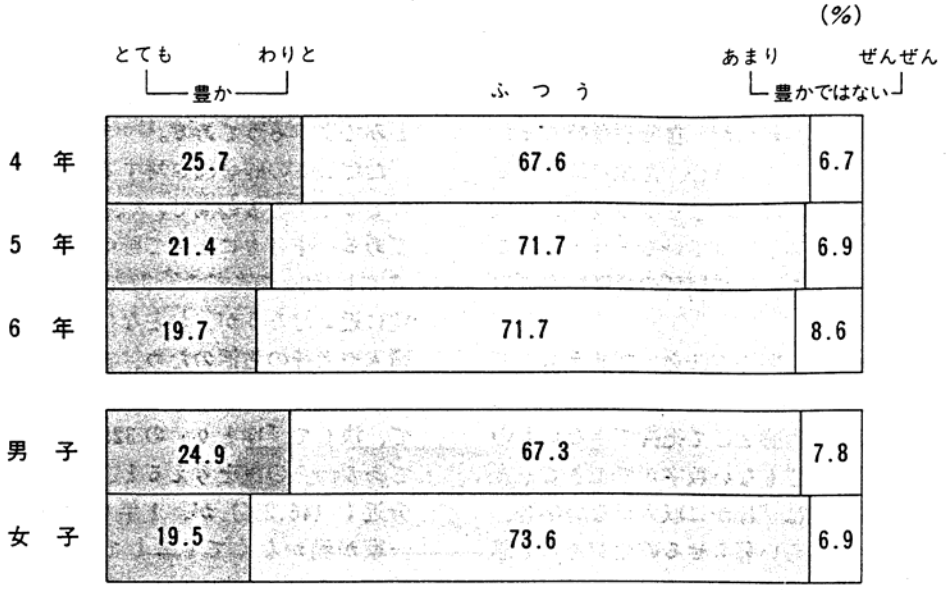


図2・我が家の経済水準



に驚かされる。この中の「主婦」には週に何日かのパートタイマーも含んでいるので、純粋な専業主婦となると、割合はもっと減るだろう。

さて次に図2は、子どもたちによる我が家の経済水準の評価である。全体としてはほぼ7割が「ふつう」と答え、「豊か」が2割強、「貧しい（ふつうより豊かでない）」が1割弱ということになる。子どもたちの中には、漠然とした「ふつう」意識が拡がっているとみてよいだろう。

これをおとなの間の数字と比較してみよう。経済企画庁による3年ごとの『国民生活選好度調査』では、昭和56年の数字として「上」が5.0%、「中の上」44.2%、「中の下」34.9%、「下」11.2%（他に無回答4.7%）の結果がある。区分の方法が違うので、直接の比較はできないが、おとなの場合「下」はむろんのこと「中の下」にもふつうより下が含まれていることを考えると、子どもはもっと「ふつう」意識（少なくとも他人より貧しくはない）を持っているとみてよさそうである。

なお念のために、父親の職業との関連を見てみると、その感じ方に職業による差がないのが特徴だ。「ふつうより貧しい」と答えた子どもは、サラリーマン家庭5.6%、その他の家庭（専門職その他を含むと思われる）7.2%、工場勤務の家庭 7.6%、自営業の家庭9.9%、商店勤務の家庭10.4%と、わずかな差でしかない。家庭によっては当然ふつうより貧しい家庭も、分布の上から存在するはずだが、それを子どもに気づかせないような配慮、つまり親心が子どもたちを包んでいるのだろう。

また図2では、学年の上昇につれてわずかながら、我が家の経済水準を客観的に把握する目が育ち始める傾向が見られる（つまり貧しいことを自覚する子どもが増える）。また男子と女子ではわずかながら、男子の方が我が家をふつうより豊か、と捉える子どもが多いことが多いことがわかる。とくに男子の方が女子より裕福感が強い傾向は、その他の調査データでも同一の方向性で現れている。これは、女子のほうが母親との距離が近く、家計のやりくりなど生活の厳しさを知っているためにでてきた判断のようにも思われる。関連した数字はこの後にもでてくるので、その考察は後に譲ることにしよう。

我が家の貯金について

こうした経済感覚をまた別の角度から見てみよう。もしわれわれが、自分を金持ちまたは中流だと判断をする場合、念頭に置かれるのは資産の額であろう。子どもの場合は、親がどのぐらい貯金を持っていると思っているか。それがさしあたって別種の経済水準の捉え方であろう。

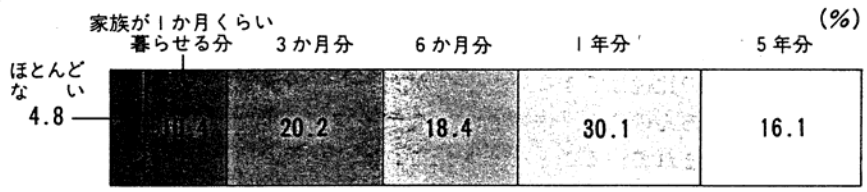
貯金額をズバリ聞く方法を、プリテストで使ってもみたのだが、何十万、何百万の金額は、子どもには実感として把握できないもののようで、とんでもない数字がでてきてしまう。そこで今回は「ほかに収入がない場合、家族が何か月ぐらい暮らせる貯金があると思うか」をたずねてみた。

図3に示したように、全体としては1年ぐらいと答えている子どもが30%で1番多く、それ以上も16%いる。ちなみに日本人の1世帯当りの貯金額は、昭和56年6月、貯蓄増強中央委員会調べで、325万円(分散が大きいので平均値でなく中央値で代表させたもの。ただし損害保険や生命保険の掛金もこの額に加えてある。またこれ以下の貯蓄額の世帯は全体の63.6%となる)だから、計算上は、ほぼ1年ぐらいということになろうか。実態と子どもの感覚との間にあまり大きなズレはない、とみてよさそうである。

ただしこの貯金額に対する感じ方の差は、おとなと子どもの間で、大きいものがありそうである。子どもにとって貯金はまさに生活のゆとり(使いみちのない遊んでいるお金)の感覚に近いだろうが、おとなにとっては、家の購入や老後の生活のため、または出産、入学、結婚その他、当然出費を予想される分の蓄えで、決して「ゆとり」の325万円ではないのである。その点を考えると、子どもたちの半分近く(46.2%)が、1年もしくはそれ以上、一家が働かなくても暮して行けるぐらいの貯金がある、と考えているという数字は、かなりの富裕感が子どもたちの間に拡がっているとみてよいであろう。

しかしこのような感覚は、ここでもまた学年を追って少しずつ変化していく。巻末資料2に掲げたように、たとえば5年くらいも遊んで暮せるほどのお金持ちと思っている子どもは、4年生では20%いるが、それが5年生で15%、6年生で13%へと次第に減っていく。つまり現実的な認識が、我が家の経済についても育っていくのであろう。

図3・我が家の貯蓄



自分の貯金は

ついでに子どもたちの貯金の有無をたずねてみた。全体の84%は多少でも貯金を持っている。男子と女子では女子の方がわずかに多い（図4）。またその額は図5の通りで、半分以上が、5万円以下だが、30万円を超す子どもも3%いる。おとなの場合と同じく分散が大きいのが特徴である。それにしても子どもにしてみれば、自分の月額のこづかい（5年生で855円、『vol.2−1子どもとこづかい』より）の何十倍何百倍の貯金があることが、彼らの経済的安定感を支える1つの要素になっていることも確かだろう。

図4・子どもの貯金の有無

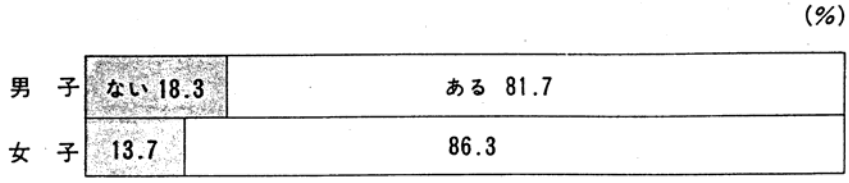
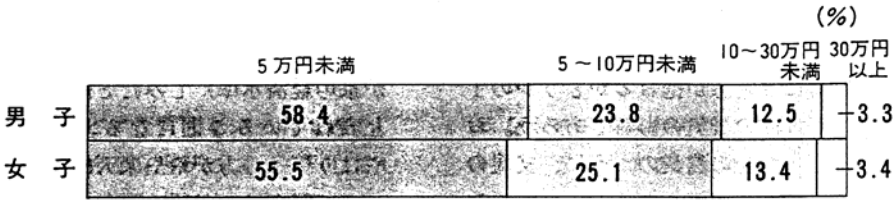


図5・貯金額（あると答えた子どもについて）



2．父親の経済力をどう見ているか

景気との関わり

家の経済の主たる支え手が父親であることは、昔も今も変わりがないであろう。とすると一体子どもは、その父親のまた時には母親の経済力に、どのような信頼感を抱いて生活しているのであろう。本章ではこの問題を、いくつかの方向から探ってみることにしよう。

父親の職業に安定感が抱けるかどうかの1つの指標は、世間の景気の影響であろう。お天気まかせだった昔の農業のように、父親の仕事が好不況の波に翻弄されるものであるなら家族の生活はオーバーに言うなら明日のわからない不安定なものと言うことになる。むろん世の中の仕事で、全く景気と関わりのないものは少ないはずだが、少なくともそうした不安感を親として、子どもには伝えない配慮がなされているであろう。

この点を見たのが図6である。全体として父親の仕事が景気の波をもろにかぶると感じているのは、ほぼ1割に過ぎない。4割の子どもは、景気に全く関係がない仕事と捉えている。

しかし学年別を見ると、4年生と、5・6年ではかなりの感じ方の違いがでてきている。4年生で、景気に関係がない、と答えた子どもは51％もいるのに、5年生6年生ではそれが36％と40％に減少している。さきに、図2（わが家の経済水準）でみたと同じ傾向がここにも表れていることになる。また性別では、やはり男子の方がやや楽天的なようである。

さて図7は、父親の職業の種類とのクロス集計である。やはり自営業や商店勤務の家庭では、景気が話題にされることが多いのであろう。子どもたちがそれを感じとっている様子がわかる。しかしここで注意したいのは、その差が僅少である点である。つまり職種によってもっと差があるはずなのが、子どもたちにはそれが感じとられていない。家庭をいごこちのよいものにし、経済的な不安を抱かせまいとする親心が、あっての結果であろう。

図6・父親の仕事と景気

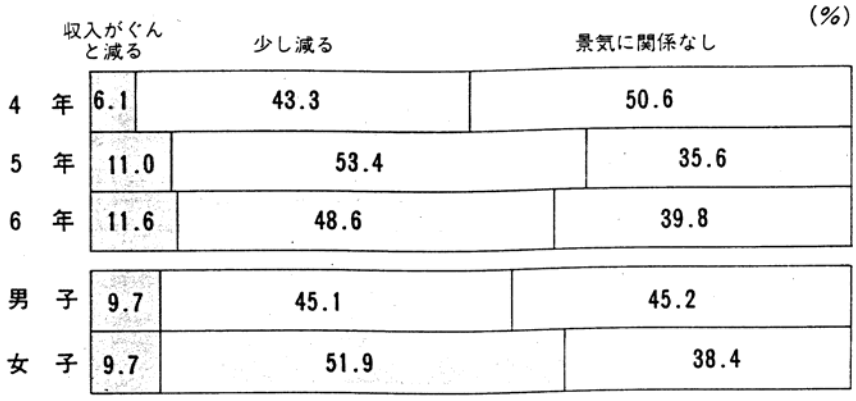
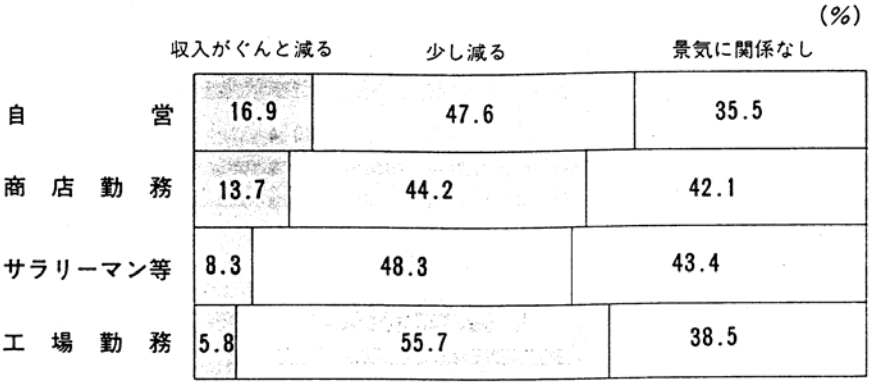


図7・父親の仕事と景気(職業別)



もし父親が失業したら

次にもっとシビアな質問をぶつけてみた。父親が失業（自営なら店がつぶれる）してしまった時の経済的回復力についてである。

勤め人と自営等のタイプによって、図8・図9を作成した。

図8の勤め人（ブルカラーも自営形態でない限りここに加えてある）の場合、子どもたちの半数以上が、たとえ失業しても「すぐに今と同じかそれ以上給料のよい所へ就職できるだろう」と答えている。この点については全くの過大評価が子どもたちの間にあるわけである。現実には「勤め口がなかなか見つからなくて」家族の生活は苦しくなるはずなのに、そう予想するのは男子で9％、女子で6％でしかない。

自営業の場合も、勤め人よりは多少再建の困難さの予想があるものの、やはり「すぐに前と同じかそれ以上に」と答えている者は、全体のほぼ3分の1にも達する。

父権が喪失したとか、父親が家族から信頼されなくなったと言われているものの、この点について言えば、父親はまだ子どもたちから絶大な信頼と力の感じを持たれていることがわかる。

図8・父親が失業したら(勤め人)

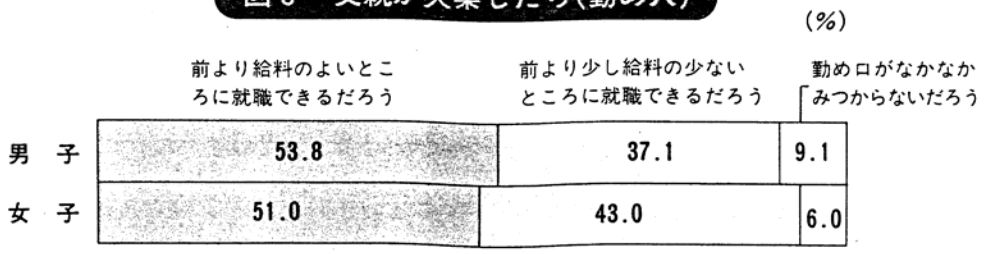
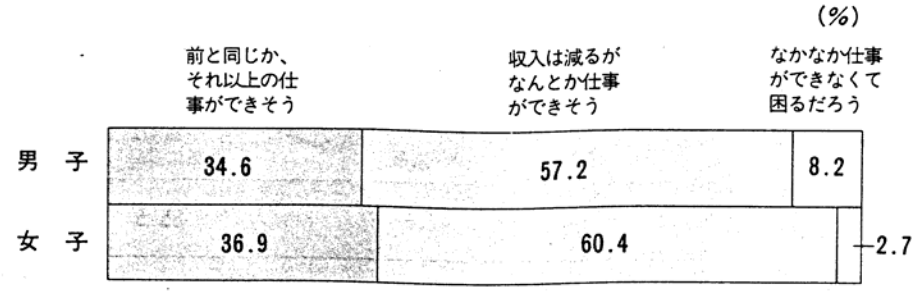


図9・父親が失業したら(自営業)



では母親は

ではもしその大黒柱である父親が働けなくなったら（死亡を仮定させるのは教育的にしのびなかったので、ケガで何年も働けなくなった時とした)、母親は父親のかわりに家族の生活を支える力を持っていると思われているのだろうか。それを図10に示した。

さすがに父親と比べると母親の経済力はそれほど大きなものと思われていない様子がわかる。全体の7割が「まあ何とか暮らして行けるだろう」と答えており、「今と同じくらいに暮らせるだろう」は2割でしかない。

しかしこの程度でも現実から見ると、かなりの過大評価であることは、間違いないだろう。現実には母親が働いても、家族の生活は「ひどく苦しくなるだろう」と思われるが、そのことを予想しているのは、わずか男子の9%、女子の6%でしかない。

また学年別にはやはり、高学年になるほど「同じぐらいに暮らせる」と答える子どもが減っている。さらに図11は、母親の職種とのクロス集計である。予想としては、自営やフルタイム・ジョブを持つ母親の方が、子どもが母親の経済力に信頼感を持っているのでは、と思ったのだが、その傾向は見られるものの、「主婦」との差はそれほど大きなものではない。フルタイム・ジョブを持つ母親といっても、それがないと父親1人では生活していけないケースも含まれるので、そうした場合の父親の失業は、「母親が働いていてやっと生活ができるのだから、母親1人ではとても生活していけないだろう」との評価になるのだろう。

しかしいずれにしても、さきに述べたように、子どもたちが両親の経済力について抱いている信頼感は、なかなかのものと言えるだろう。

図10・働けなくなった父親のかわりに母親が働いたら

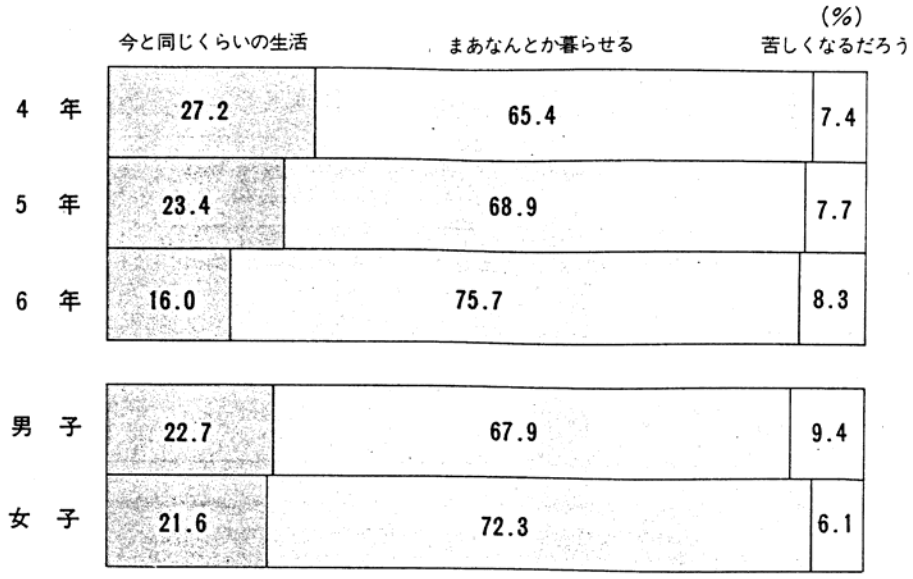
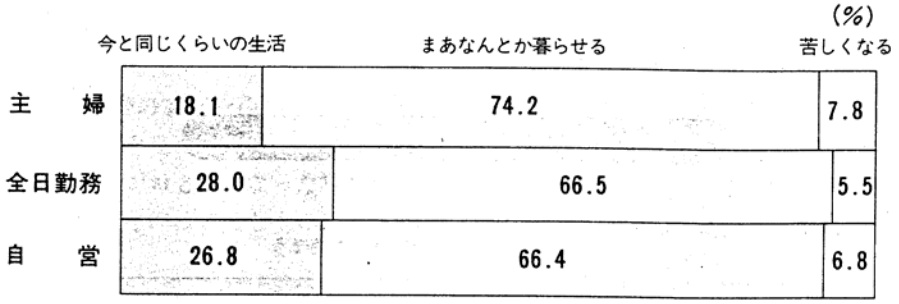


図11・働けなくなった父親のかわりに母親が働いたら(母親の職業別)



困った時に助けてくれる人は

さて次に少し角度を変えて、経済的に困った時に自分の一家を助けてくれる人が、どのぐらいいると思っているか、に接近してみよう。父母の経済力にかなりの信頼がよせられていることは見てきた通りだが、これで、もし困った時にお金を貸してくれる人が、世間にはゴロゴロしているものだと子どもたちが考えているとしたら、彼らの経済的安定感は、不動のものということになるだろう。

まず図12は、「あなたの家で今、急に10万円のお金が必要になったとします。そんな時にすぐ10万円貸してくれる親戚は」とたずねた結果である。図が示すように「何軒もありそう」と答えた子どもの割合は4割。思ったより少ない。「1軒もなさそう」と答えた子どもも7%いる。

では100万円は、と金額をつり上げてみるとその割合は逆転し、「1軒もなさそう」と答

図12・急に10万円貸してくれる親戚

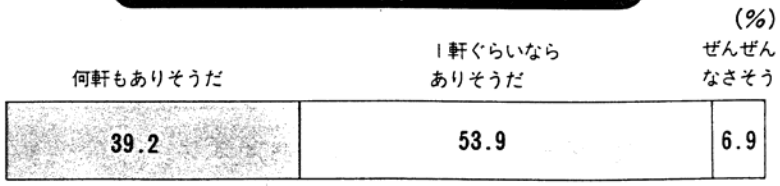


図13・急に100万円貸してくれる親戚

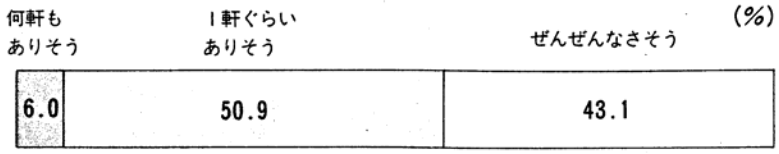


図14・急に10万円貸してくれる友人

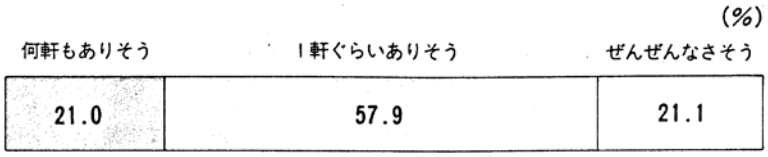
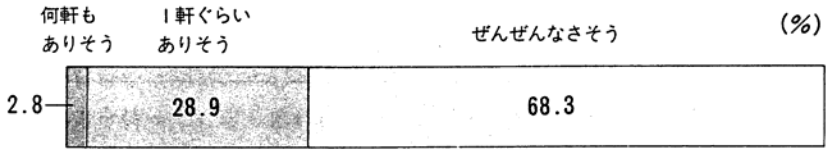


図15・急に100万円貸してくれる友人



えた子どもが4割。「何軒もありそう」はわずか6%となってしまう。

しかも、もともと親戚の人数はそれほど多くないとも考えられるので、この数字はやむを得ないところとみることもできよう。とすれば無限にいる勘定の他人、つまり「友人」はどうなのか。

ところが図14・図15で示したように、その割合は親戚の場合より、また大幅に減ってしまう。10万円貸してくれる（父母の）友人が、「何軒もありそうだ」と答えているのはわずか2割。また100万円となると更に減って、3%、逆に「全然なさそう」が、7割にも達してしまう。

つまり、子どもたちにとっての「渡る世間」とは、意外に厳しく味方の少ないものとして感じとられているもののようである。また友人に信頼を置かず、血縁への依存感情が大きいことも特徴である。

3．将来の経済生活

以上、現在の自分の家庭を中心に、子どもたちの経済的安定感を見てきたわけだが、それではこの先、自分がおとなになった時、自分の作る家庭の経済水準はどんなものだと、予測しているのだろう。今よりもっと豊かで安定したものになるはずか、それともレベルダウンしそうだと思っているのだろうか。

どんな職業につきたいか

子どもたちの描く将来像としては、まず子どもがつきたいと思っている職業から、始めなければならないだろう。

まず図16に、つきたい職業を掲げた。また図17には、それについての達成の難易度の判断を示した。

つきたい仕事は、この年齢でかなりの性差が見い出され、男子はいわゆるサラリーマン、女子は教職が1位に挙がっている。(この分類基準は巻末資料3に示した) 自分の希望する職業は、子どもたちにとって、けっこう達成の難しいものと判断されているようで、図17に示したように、7割が「ひどく・かなり」なるのが難しいと答えている。

図16・つきたい職業

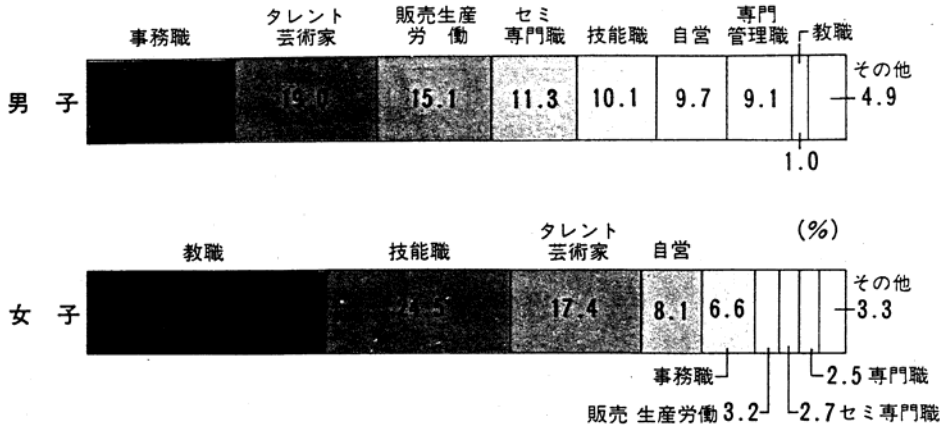
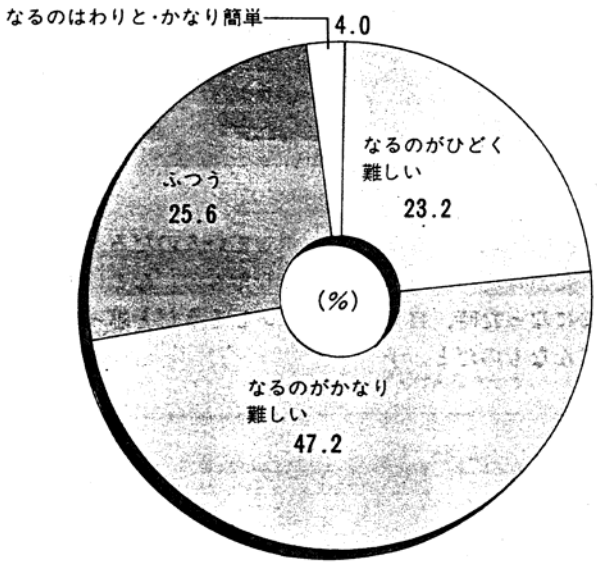


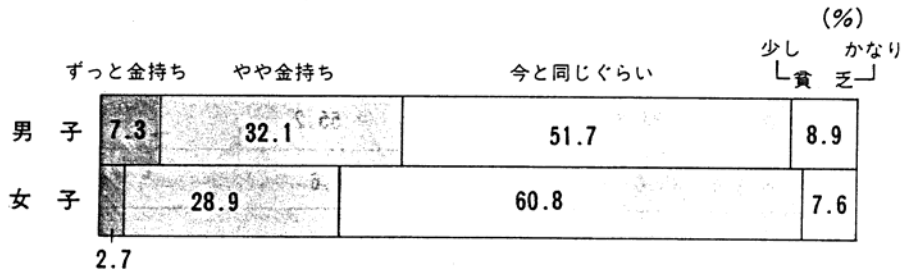
図17・つきたい職業の難易度



我が家の先ゆき

さて図18は、将来、といっても本人が18歳になった頃、自分の家は今よりもっと豊かになっていると思うか、それとも貧しくなっていると思うか、をたずねた結果である。全体の36%は今より「ずっと・やや」金持ちになっているだろうと答え、56%は現状ぐらい。下降を

図18・将来の我が家の経済水集

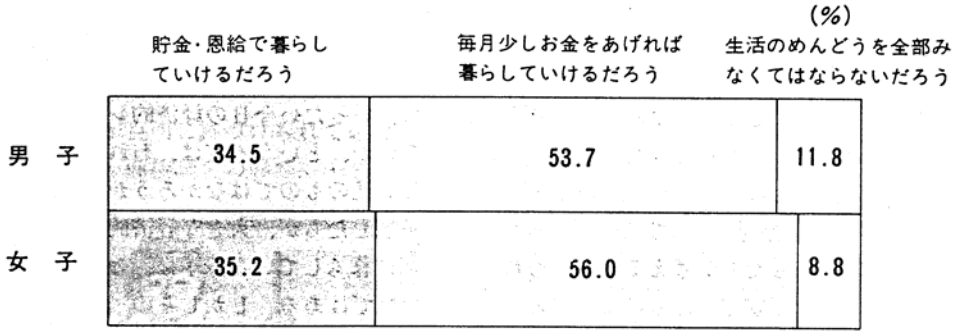


予想しているのは8%に過ぎない。

また図19は、それよりもっと先、両親の老後の予想である。両親が働けなくなった時に、子どもたちから経済援助を必要とするかどうかである。むろん客観的な判断はできないだろうが、これによって漠然とした富裕感を探ってみようとしたものである。

図が示すように、「全面的にめんどうを見なければならないだろう」とシビアな予想をしている子どもは、わずか（男子で12%、女子9%）である。全く両親たちだけで暮らせると楽観している子どもが3分の1。こづかい程度を援助すればかなりの部分は親たちのお金で暮らしていけるだろう、と考えている者は半分以上に達する。この点でも子どもたちの経済安定感は、またまたかなりのものと言えそうである。

図19・老後両親だけで暮らせると思うか

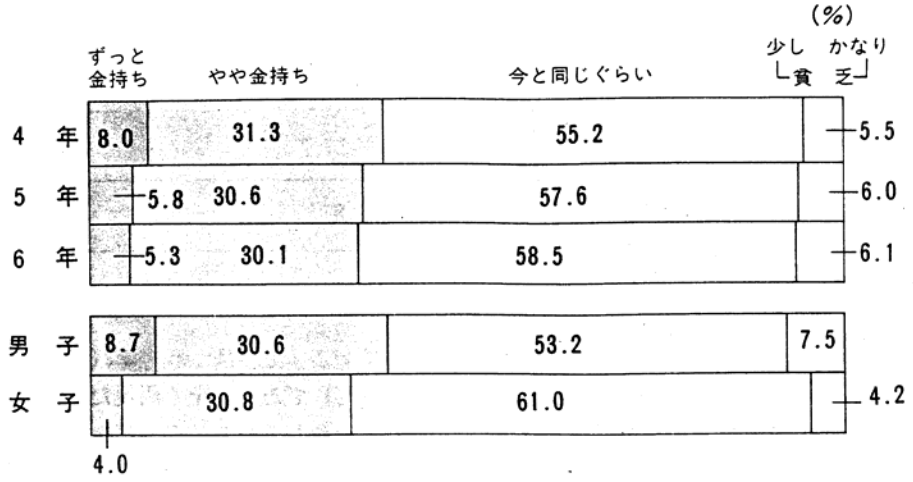


将来自分の作る家庭は

最後に子どもたちが、将来自分が親となって作っていかなければならない家庭とは、どんなものと予想されているのかを見てみよう。

図20が示すように、子どもたちの57%が少くとも現状維持はできるだろうと考えており、今よりもっと豊かな暮らしができるだろうと考えている子どもも、37%いる。親と同じ生活はできそうもないと危んでいる子どもは、わずか6%でしかない。ここに至っても、子どもたちはきわめて楽天的だ。

図20・将来作る家庭の経済水準



まとめにかえて

以上見てきたように、今回の調査データから子どもたちが、我が家をまあまあ豊かだと思い、親の経済力を絶大に信頼し、我が家も自分の作る家庭も将来よくなることはあっても、今より貧しくなることはないだろう、と考えている様子が浮かび上がってきたわけである。まさに「豊かな社会」に生まれ育っている子どもたちの、甘い経済感覚といっていいであろう。

しかし一体子どもたちが考えるほど、われわれの社会は豊かで安定したものなのだろうか。そしてこれから先も、ずっとこうした経済状況が続くとの保証があるのだろうか。

少なくともおとなであるわれわれは、過去の貧しかった日本を知っている。やや年輩の読者は、ポンプで水を汲み、薪でごはんを炊き、炭で暖をとった昔の生活を体験しているだろう。そうした貧しい社会で、欧米から働き中毒と名ざしで笑われる程懸命に働き続けて、今日のように、いつでもお湯が出、テレビがあり、クーラーと自家用車を持つ生活を築き上げたことも知っている。事実そうした経済の担い手なのである。

しかし生まれた時から、クーラーや自家用車を当然のことと受けとめて育ってきた子どもたちが、日本社会の担い手になった時に、いったい今日の経済的レベルを維持できるのか、という不安は、われわれおとなたちに共通のものではなかろうか。今われわれの子どもたちが、大きな経済的安定感の中で幸せに暮らしている様子は、むろんわれわれの喜びではある。しかしその一方で、若い世代にもっと生活の厳しさを教え、現在もそして将来もわれわれの社会は、決して安定したものでも、十分に豊かなものでもないことを、何らかの形で伝え、教育していかなくてもよいものだろうか。いたずらに保護だけを与え、温室の中で平和なまどろみの中に置くことが、果して子どもたちにとってベストの環境であり、一番よい子育てのあり方なのか。考えてみなければならないことなのではなかろうか。

シリーズ 子・ど・も・考・現・学

子どもの姿昔と今（2）

家事手伝い

深谷昌志
（奈良教育大学教授）

手伝いが毎日一時間以上

月に2～3回、かなりの時間を費して、東京の古本屋街を歩くことにしている。子どもの生活史をまとめてみたいと思いたったものの、資料がいかにも乏しい。半日を費して、めぼしい本が一冊も見つからない時が少なくない。そのため、年月のかかっているわりに資料の集まり具合は遅々としている。

それだけに、よい資料を入手できた時は、小躍りしたい気分になる。そうしたある日、『児童生活の実態』（昭和18年朝倉書房）という書名が目にとまった。戦時下のものゆえ、せんか紙にボール紙の装丁の見るからに安そうな本だが、値段は、大枚一万円也と、目の飛び出るほど高い。

ページをめくってみると、これは、日本青少年教育研究所の実施した調査報告書で、小学生の生活記録が克明に跡づけられていた。

各学校を訪れ、面接調査の形で、子どもたちの生活記録をとり始めてから、10年近く過ぎた。この間、100校を超える学校へ出向いた計算になる。独創的でユニークな研究方法だと、ひそかに自負するものがあったが、40年も前に、同じ手法をとった先達がいるのを知り、愕然となった。

なん度か躊躇した末、先輩に敬意を払う意味も兼ねて、その本を求めることにしたのだが、その中に、次のような数値がある。

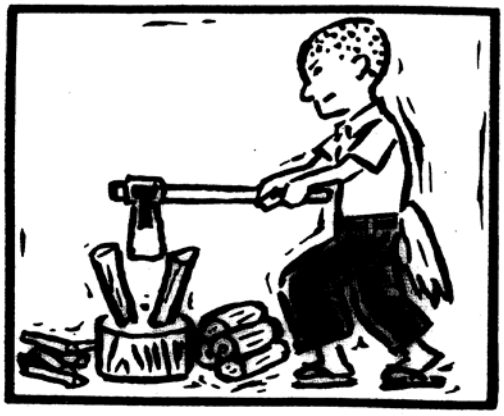
	平日	休日
遊び	1時間2分	3時間35分
手伝い	1時間13分	2時間30分
予習・復習	58分	1時間17分
読書	30分	47分
ラジオ	22分	32分

子どもたちが、平日で1時間以上、休日は2時間半近く、家事を手伝っている。しかも同じ昭和10年代に、東京府社会教育課の実施した『少国民生活調査報告』（昭和18年）を見ても、当時の子どもの手伝い時間は、以下の通りだという。

	男子	女子
小4	1時間2分	1時間14分
小6	1時間13分	1時間10分
高小2	1時間43分	2時間28分

つまり、家事を1時間以上手伝うのが、子どもとして当然の日課という結果である。

なお、手伝いの内容を見ると、子守、掃



除、水汲み、炊事、薪割り、洗たく、草むしり、湯立てなどが挙げられている。

それでも、この時代の子どもたちは、幸せというべきなのかもしれない。少なくとも、学校へ通い、そして、放課後、遊ぶことが、子どもらしさの表われとして、公認されているからである。

子守学校

「信濃教育会雑誌」と言えば、信濃教育を理論的にリードした雑誌として知られる。その雑誌の明治31年12月25日号に、「子守教育案序論一班」と題された論文がのせられている。筆者は、子守教育取調委員とある。つまり、信濃教育会から子守教育の取り調べを委託された委員の報告書である。

子ども、特に、女児の不就学の原因は、第一に子守、次いで、家庭の貧困、3位に学校の教材が適切さを欠く、4位は、就学の必要性を感じない社会的な風土にある。したがって、そうした実情を配慮し、子どもたちに就学の機会を与えるためには、従来から行われてきた子守教育の充実を図る必要があるとの骨子である。

子守学校（級）は、文字通り、子守りなどのため、就学できない子どもたちを対象として、放課後1～2時間を使い、基礎的な読み書き能力の伝達を目指したもので、長野県では、明治24年に開校された植科郡屋代子守学校が嚆矢（こうし）と言われる。

神津善三郎の『教育哀史』（銀河書房、昭和49年）によると、明治28年、長野県の就学児童数は男子1万4千人、女子1万1千人だが、明治32年に尋常小学校（当時は4年）を卒業した者は、男子1万2千人、女子6千名である。つまり、男子の2割、女子のほぼ半数が、小学校を中退している。

もちろん、こうした状況は、長野県に限ら

れていないから、その他にも、子守学校の記録を残している県が多い。たとえば、千葉県の場合、すでに、明治10年代の後半、子守学校のスタートを見ているが、明治35年、「特別学級設置ニツキ」訓令を発し、「子守及被雇者等ニシテ普通ノ学令児童ト同様ニ就学スル能ハサルモノ」の就学を奨励している。

なお、『千葉県教育百年史』（第3巻）所収の「香取郡干潟町西小学校子守学校明治36年度日誌」を要約すると、表1の通りとなる。形式的にみると、3時間制になっているが、実際の授業の長さは1時間程度、週に3～4回開校が、子守教育の実際だったように考えられる。

表1・千葉県下の子守学校の授業

		天　気	出　席	1　時	2　時	3　時	備　　考
4．17	金	大　雨	8	国　語	書　方		雨のため子どもが少ない
18	土	晴	17	修　身	習　字	唱　歌	習字は「世のため」
19	日	雨	20	修　身	習　字	唱　歌	唱歌は春雨
21	火	―	18	修　身	習　字	唱　歌	唱歌は大江山
23	木	晴	17	習　字		唱　歌	2名就学
27	月	くもり	―	修　身	算　数		木綿1反は2丈8尺
28	火	くもり	16	気　候	習　字	唱　歌	唱歌は子守歌
30	木	雨	16	書　方	修　身	唱　歌	修身は孝行の話
5．2	土	―	9	習　字	お　話	唱　歌	習字は父母の恩

（『千葉県教科百年史』3巻 P. 316～318より）

子守学校へ通う子どもたちが、全国的にどの程度に及んだのかは、残念ながら明らかでない。しかし、詳細な県教育史の刊行されているほとんどの県で、子守学校の存在が認められているのを見ると、程度の差こそあれ、子守学校的な教育形態が全国的に広まっていたのは否定しがたいように考えられる。

もちろん、子守学校は、主として、農村部に作られているが、都市の場合、工場で働く子どもの数は少なくなかった。

詳細は農商務省の『職工事情』や猫山源之助の『日本の下層社会』などにくわしいが、10歳未満の幼年工の存在はまれではなかった。そのため、明治30年代へ入ると、幼年工の就労禁止をめぐって、工場法の審議が進められている。しかし

「十才未満ノ幼者ノ工場ニ於テ使役スルコトヲ得ス、但特別ノ事由アルトキハ当該官庁ノ許可ヲ受ケ之ヲ延長スルコトヲ得」（明治31年、工場法案、第9条）

のただし書のついた就労禁止案でも、反対論が強かったという。

「10才以下ノ子供ヲ使ッテ居ル工場ハ実ニ多イノデス。ソウシタ職工ハドウト云フニ衛生ニ害ガ無イノミナラズ、（中略）、（本来なら、農作業に従事するので）田畑デ一日炎天ニ曝サレルヨリ余程宜カラウト思フ」（『明治文化資料叢書』第1巻、産業編所収、工場法審議の討議中の発言）

というような考え方が支配的だったからであろう。

このため、工場法の制定は遅れ、曲りなりにも、子どもの就労禁止が規定されるのは、明治44年を待たねばならなかった。

就労から手伝いへ

しかし、ここでは、児童労働の実態を跡づけるつもりはない。子どもの歴史の中で、長い間、子どもが働く存在であったのを指摘したかったのである。明治の中頃までなら、小作として、農作業に従事するか、それとも、親方の許で年季奉公をするかが、子どもの生活であった。

もちろん、いつの時代でも、子どもの就労を望ましいと思っている親はいるまい。子どもが働かないですむ世の中を、誰しも望んでいよう。

しかし、大づかみにすると、明治30年代の初めまで、子どもの就労は、むしろ、ありふれた現象であったし、小学校就学が定着した30年以降も、フル・タイムでないにせよ、働く子どもの姿が認められるのは、すでに指摘した通りである。それでも、明治末になると、就労そのものは減っているが、手伝いが子どもの生活の中で、大きな比重を占めている事実に変わりはなかった。

そうした傾向は、第二次世界大戦後にも引き継がれている。無着成恭の『山びこ学校』は、戦後を代表する秀れた実践記録のひとつだが、角度を変えた読み方をすると、子どもたちが生活記録を書き綴った文集になる。

江口江一の「母の死とその後」はむろんのことだが、佐藤代理子の「雨」は、

山へ　いもまきに行った
兄さんは　ダラ（下肥）さ
私は　いもだねを
弟は　カリンサンを
それぞれ背負って
うん　うん　のぼって行った

で始まっている。また、石井敏雄の「すみ山」に、「私はまいにち学校にもゆかず、すみ山に行きました。私はみんなのように学校にゆけたらなとおもっているときがたびたびあるのです」の記述がみられる。小笠原弘子の「わらびうり」は、文字通り、町へわらびを売りに行った記録だし、川合ハマ子の「稲」にも「今年は働く人がたりなくて、仕事がはかいかないので、私はたびたび学校を休まなければなりません。この間の稲上げのときも学校をひまもらって稲背負いしました」と書かれている。

『山びこ学校』に収録されている作品は、昭和23年から24年にかけての生活記録だが、昭和28年に、山形県の山村を対象に実施された調査結果（文部省『イリの村の生活と子ども』昭和29年）によると、西村山郡七軒南部小学校（4～6年）の子どもたちの生活時間は、以下の通りだという。

	平　日	休　日
手伝い	2時間37分	8時間40分
勉　強	46分	1時間53分
遊　び	1時間26分	2時間37分

平日は2時間半だが、休日になると、手伝いが9時間に達する。子守、炊事、小間使い、留守番などが、手伝いの内容である。

子どものために家事手伝いを

『小学生ナウ』Vol.1-5に「手伝いを考える」の調査データがもられている。小学校高学年の場合、手伝いを「毎日している」子どもの割合は

5割以上　食器を流しへ運ぶ（62%）
4割台　ふとんをひく（46%）、
　　食器並べ（40%）
3割台　戸締り（32%）、
　　ふとんのかたづけ（31%）
2割台　お茶を入れる（21%）

の通りである。現代の子どもにとって、手伝いと言えるのは、わずかに「自分の食器を流しへ運ぶ」か、よく手伝う子どもで「食器並べ」か「ふとんしき」に限られている。全部やったところで、10分とはかかるまい。

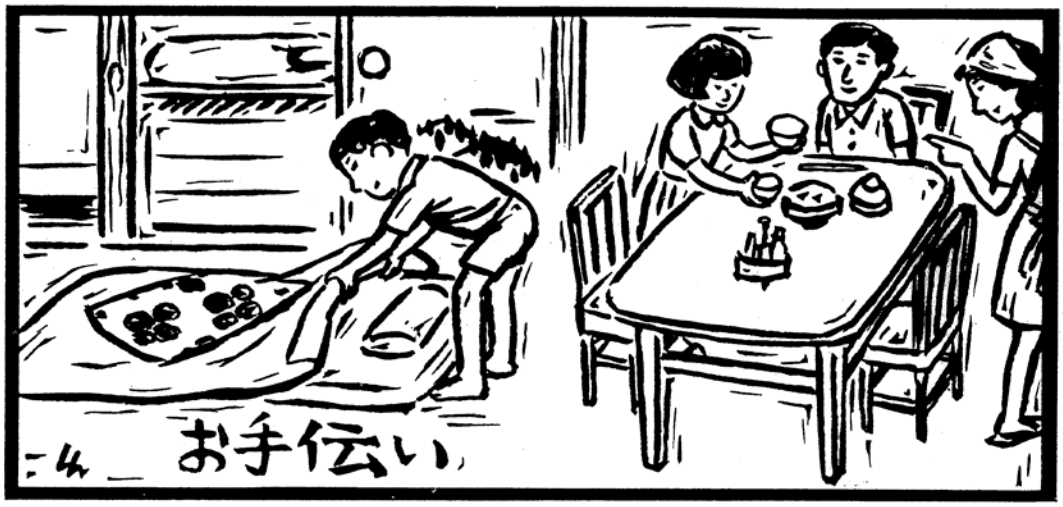
ちなみに、時間が多少かかりそうな「食器を拭く」や「洗たく物をたたむ」などをしている子どもは、いずれも1割を下回わっている。

こうした数値を、今まで触れた子どもの歴史の中に位置づけてみると、まさに、隔世の感がすると言わざるを得ない。労働はむろんのこと、手伝いとまったく無縁の子どもたちが誕生している。

『国民生活白書』を手がかりにすると、昭和20年代までの家庭にある耐久消費財は、ミシン、ラジオ、自転車程度で、昭和30年代に入ると、これに、「三種の神器」と呼ばれた電気洗たく機、テレビ、電気冷蔵庫が加わり、そして、30年代の中頃、ミキサーや電気掃除機の普及が始まる。

つまり、この4半世紀の間に、家事の省力化が、予想以上の速さで、進展した計算になる。そうした家事の省力化は、確かに、主婦たちを家事の束縛から解放するのに役立ったし、快適な生活環境をもたらしたのも否定しがたい。

そして、親たちの世代は、炭火、プロパンガス、電気と、家庭電化製品の普及とともに成長してきたから、いざとなれば、電気がなくとも、炭火だけで生活できよう。しかし子どもたちの場合、小学校高学年生に例をとれ

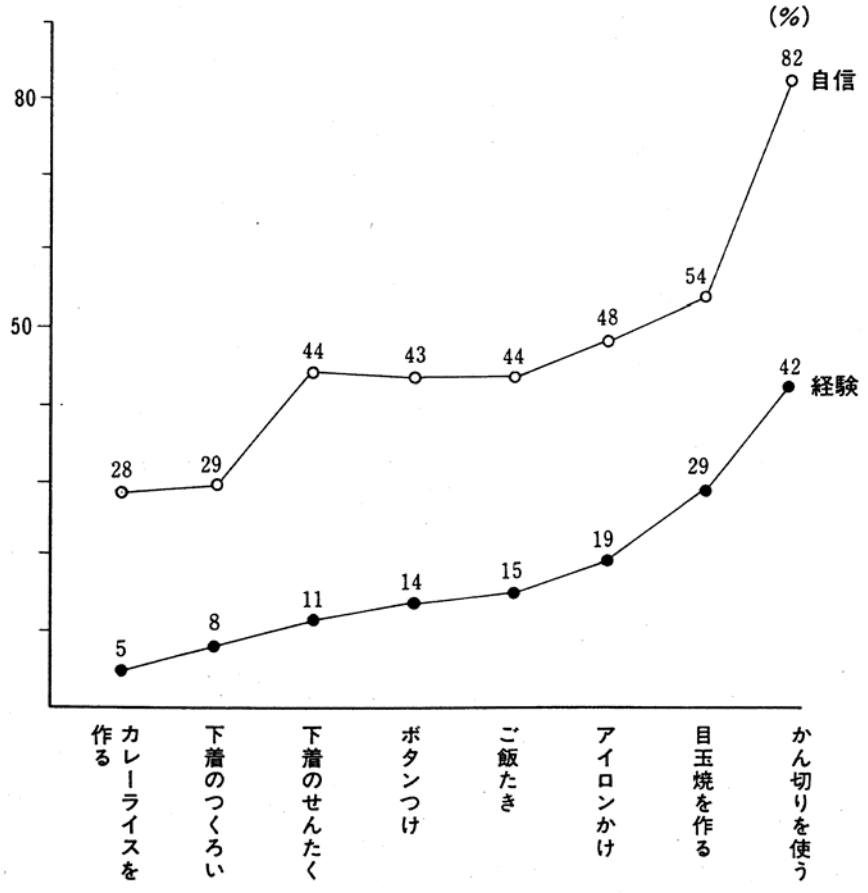


ば、冷蔵庫91%、洗たく機94%、テレビ82%の普及率（昭和46年）の家庭で生まれている。したがって、薪でご飯をたく、あるいは、手で洗たくをする、そして、ろうそくの明りで暮らすなどの体験を持っていないのが当然であろう。

昭和53年に、大阪府下の小学校高学年生約2千名を対象に行なった調査の中に、図1のような結果がある。これは、家事を実際にしている割合を、やればできると思うと対比させて示したものだが、経験の乏しいわりに、家事に自信を持っている子どもが多いのが目につく。カレーライスを作ったことのある子どもは5%なのに、やれば作れると思っている子どもが28%に達するのが、その一例である。

自分でやったことのないものは、簡単そう

図1・家事の経験と自信



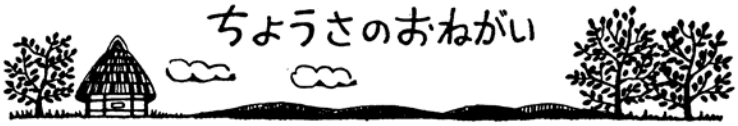
注）経験＝この1年間に10回以上したことのある割合
自信＝やれば「きっと」「たぶん」うまくできると思っている割合

に見える。特に、家事は、母親のしているのを見ているだけに、やさしそうに思える。しかし、実際にやってみると、カレーライスはおろか、目玉焼も作れまい。

生きていくために、なにより必要なのは、衣食住を切りもりしていく力であろう。誇張した言い方をすれば、小数や分数はわからなくとも死にはしまい。しかし、火をつけられずご飯を炊けなくては、生存が危くなる。

長い歴史の中で、手伝いは、家庭の仕事を助けるのを任務としていた。そして、電気製品の普及した現在、そうした意味での手伝いは不要になった。しかし、家事をまったくせずに大きくなる子どもの状況を考えると、子どもの将来のために、家事能力をきちんと身につけさせることが必要になろう。

親のためでなく、子どものために家事を手伝わせる。そうした発想をふまえたしつけが、今後の家庭教育の中で望まれてならない。



ちょうさのおねがい

これはテストではありません。日本の子どもたちにたくさんおねがいして、その生活をしらべるためのものです。思ったことをそのまま答えてください。

やりかたの練習

あなたはカレーライスがすきですか？

とてもすき	かなりすき	ふつう	すこしきらい	とてもきらい
1	②	3	4	5

あなたがもしカレーライスを[かなりすき]だと思ったら
上のように番号のところを○でかこんでください。

1 まず学年などを書いてください。

① 学校の名まえ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿小学校

② 学年……（4，5，6）年〈○でかこむ〉

③ 男女……（1.男　2.女）〈○でかこむ〉

2 あなたは、おとなになったら、どんなしごとをする人になりたいですか。下に書いてください。

3 あなたのおとなになった時にやりたいしごとは、なるのがとてもむずかしいしごとですか。それともわりとかんたんになれるしごとですか。

なるのがひどくむずかしいしごと	なるのがかなりむずかしいしごと	ふつうのしごと	なるのはわりとかんたんなしごと	なるのはとてもかんたんな（だれでもなれる）しごと
1	2	3	4	5

4 あなたのお父さんの仕事（しごと）は何ですか。（お父さんのいない人は6へとぶ）

1．おつとめ（サラリーマン・こうむいん・先生など）をしている

2．お店につとめている

3．工場につとめている

4．自分でお店をやっている

5．そのほか

5 あなたのお父さんの仕事は、世の中のけいきがわるくなると、収入(しゅうにゅう)がへるような仕事ですか。それとも、ふけいきでもかんけいない仕事ですか。

1．世の中が、ふけいきだと収入（しゅうにゅう）が ぐんと へる
2．ふけいきだと収入（しゅうにゅう）が すこし へる
3．ふけいきでもぜんぜんかんけいない

6 あなたの家には、貯金（ちょきん）がどのくらいあると思いますか。

1．ほとんどないと思う
2．ほかにお金が入らなくても、私の家族(かぞく)が貯金（ちょきん）だけで、1か月くらい、くらしていける分はあるだろう
3．家族(かぞく)が3か月くらい、くらしていける分はあるだろう
4．家族が6か月くらい、くらしていける分はあるだろう
5．家族が1年くらい、くらしていける分はあるだろう
6．家族が5年くらい　くらしていける分はあるだろう

7 あなたのお父さんが、何かのことでとつぜん仕事をやめてしまったとします。（サラリーマンだったら、会社がつぶれるとか、お店だったら火事でやけてしまうなど）
そんな時に、お父さんはそれからどうすると思いますか。（お父さんのいない人は9へとぶ）
（Ⓐおつとめの人とⒷお店やさんや自分で仕事をしている人とでわけて答えてください。）

Ⓐおつとめをしているお父さん

1．すぐに前と同じくらいか、前よりもお給料（きゅうりょう）のよいところへ、しゅうしょくできるだろう
2．前よりもすこしお給料(きゅうりょう)の少ないところなら、しゅうしょくできるだろう
3．つとめ口がなかなか見つからなくて、たいへんだろう（家族の生活も苦しくなるだろう）

Ⓑ（Ⓐで答えた人はとばしてください）
自分でしごとをしているお父さん（お店やさん、工場をしている、お医者さん、物を作っている人など）

1．すぐ前と同じくらいか、前よりもりっぱにしごとをして行けるだろう
2．前よりお金は入らなくなるが、まあなんとかしごとをして行けるだろう
3．なかなかしごとができなくて家族の生活は苦しくなるだろう

8 あなたのお父さんが、もしケガをして何年もはたらけなくなったとします。そんなときお母さんのはたらきで、家ぞくはくらしていけるでしょうか。

1．お母さんがつとめたり仕事をしたりすれば、今と同じくらいの生活ができるだろう

2．お母さんがつとめたり仕事をしたりすれば、今よりすこし貧しいが家ぞくは、まあなんとかくらしていけるだろう

3．お母さんがはたらいても、家ぞくの生活はひどく苦しくなるだろう

9 あなたの家で、いま急に 10万円 のお金がいることになったとします。そんなときすぐ10万円かしてくれる人がいると思いますか。

Ⓐ 10万円ならすぐかしてくれる しんせき は

何げんも ありそうだ — 1けんぐらいなら ありそうだ — ぜんぜん なさそうだ
1 — 2 — 3

Ⓑ 10万円ぐらいならすぐかしてくれる 友だち (お父さんやお母さんの)は

何人も ありそうだ — 1人ぐらい ならありそうだ — ぜんぜん なさそうだ
1 — 2 — 3

10 では 100万円 かしてほしいと思ったらどうですか。

Ⓐ 100万円ならすぐかしてくれる しんせき は

何げんも ありそうだ — 1けんくらいなら ありそうだ — ぜんぜん なさそうだ
1 — 2 — 3

Ⓑ 100万円ならすぐかしてくれる 友だち (お父さんやお母さんの)は

何人も ありそうだ — 1人くらいなら ありそうだ — ぜんぜん なさそうだ
1 — 2 — 3

11 あなたの両親は、しょうらい年をとってはたらけなくなったときに2人だけでくらしていけると思いますか。それとも子どもたちが毎月お金を出してあげなければ、くらせないと思いますか。

1．ちょ金やおんきゅうなどがあるので、なんとか2人だけでくらしていけるだろう

2．子ども（あなたやきょうだい）たちが、毎月すこしお金をあげれば、あとは2人だけでくらしていけるだろう

3．（ちょ金も多くなさそうなので）子ども（あなたやきょうだい）が全部両親の生活のめんどうをみなくてはならないだろう

12 あなたの家のくらしは今、ふつうの家とくらべてゆたか（お金持ち）なほうですか。それともあまりゆたか（お金持ち）ではありませんか。

とてもゆたか（お金持ち）	わりとゆたか（お金持ち）	ふつうぐらい	あまりゆたかでない（お金持ちでない）	ぜんぜんゆたかでない（お金持ちでない）
1	2	3	4	5

13 あなたの家はあなたが大学にはいるころ（18才くらい）今よりお金持ちになっているでしょうか。それともびんぼうになっているように思いますか。

今よりずっとお金持ちだろう	今よりややお金持ちだろう	今とおなじぐらいだろう	今よりちょっとびんぼうだろう	今よりかなりびんぼうだろう
1	2	3	4	5

14 あなたはしょうらいお父さんくらい（男子のばあい）またはお母さんくらい（女子のばあい）のとしになったとき、どのていどの生活をしていると思いますか。そうぞうしてみてください。

今のあなたの家とくらべると、しょうらいあなたがつくる家庭（かてい）は

今よりずっとお金持ちだろう	今よりややお金持ちだろう	今とおなじぐらいだろう	今よりちょっとびんぼうだろう	今よりかなりびんぼうだろう
1	2	3	4	5

15 あなたのお母さんのお仕事は

1．主婦（何もしていないかパートでしごとしている）
2．毎日おつとめしている
3．自分の家の仕事（店、工場、病院など）をてつだっている
4．そのほか（お母さんのいない人もここへ○）

16 あなたはべんきょうがとくいなほうですか。それともにがてなほうですか。

とてもとくい	わりととくい	ふつう	わりとにがて	とてもにがて
1	2	3	4	5

17 あなたはおこづかいやお年玉をちょ金していますか。

1．ちょ金していない
2．ちょ金をしている——→ぜんぶで［　　］円ぐらいある

——これでおわりです。ありがとうございました。——

● 資料2　学年・性別集計表

単位　Q1…(人)　Q2～Q17…(%)

	質問項目			全体	性別 男子	性別 女子	学年別 4年	学年別 5年	学年別 6年
Q1	サンプル数	学年	4　年	664	363	301			
			5　年	645	339	306			
			6　年	657	306	351			
		性	男　子	1,008					
			女　子	958					
Q2	将来の職業選択		1．専門管理職	5.8	9.1	2.5	6.3	8.3	3.0
			2．セミ専門職	7.0	11.3	2.7	6.3	9.7	5.1
			3．技術職	17.3	10.1	24.5	20.1	14.3	17.2
			4．教　職	16.3	1.0	31.7	10.8	16.8	21.6
			5．事務職	13.3	19.8	6.6	12.9	12.6	14.2
			6．販売生産労働	9.2	15.1	3.2	8.5	10.6	8.5
			7．自　営	8.9	9.7	8.1	11.8	7.0	7.7
			8．タレント・芸術家	18.1	19.0	17.4	20.1	17.6	16.8
			9．その他	4.1	4.9	3.3	3.2	3.1	5.9
Q3	将来の職業の難易度		1．なるのがひどくむずかしい仕事	23.2	26.4	19.9	24.6	24.2	20.9
			2．なるのがかなりむずかしい仕事	47.2	41.7	52.8	45.3	47.0	49.2
			3．ふつうの仕事	25.6	27.9	23.2	25.1	25.9	25.7
			4．なるのはわりと簡単な仕事	2.6	2.5	2.7	3.0	2.4	2.5
			5．だれでもなれる仕事	1.4	1.5	1.4	2.0	0.5	1.7
Q4	父の職業		1．おつとめ(サラリーマン・公務員・先生など)	56.7	56.5	57.0	55.1	58.3	56.6
			2．お店につとめている	5.7	7.0	4.3	6.9	4.8	5.4
			3．工場につとめている	9.2	7.8	10.6	8.0	8.5	11.1
			4．自分で店をやっている	9.7	10.1	9.2	8.6	9.5	10.9
			5．その他	18.7	18.6	18.9	21.4	18.9	16.0
Q5	父の収入		1．不景気だと収入がぐんと減る	9.7	9.7	9.7	6.1	11.0	11.6
			2．不景気だと収入が少し減る	48.5	45.1	51.9	43.3	53.4	48.6
			3．不景気でも全然関係ない	41.8	45.2	38.4	50.6	35.6	39.8
Q6	家の貯蓄高		1．ほとんどないだろう	4.8	5.5	4.1	5.1	5.7	3.7
			2．家族が1か月くらいくらせるだろう	10.4	10.9	9.9	10.1	8.8	12.1
			3．家族が3か月くらいくらせるだろう	20.2	21.8	18.6	15.2	22.7	22.9
			4．家族が6か月くらいくらせるだろう	18.4	17.8	19.0	18.4	17.7	19.0
			5．家族が1年くらいくらせるだろう	30.1	27.2	33.0	30.9	30.2	29.2
			6．家族が5年くらいくらせるだろう	16.1	16.8	15.4	20.3	14.9	13.1
Q-7Ⓐ	父の再就職		1．以前より給料のよいところに就職できそう	52.4	53.8	51.0	59.2	48.3	49.8
			2．以前より給料の少ないところに就職できそう	40.0	37.1	43.0	34.8	41.7	43.4
			3．勤め口がなかなかみつからないだろう	7.6	9.1	6.0	6.0	10.0	6.8
Q-7Ⓑ	父の仕事の再建		1．以前なみかそれ以上の仕事ができそう	35.8	34.6	36.9	37.3	34.8	35.2
			2．収入は減るがなんとか仕事ができそう	58.7	57.2	60.4	56.0	60.2	59.9
			3．なかなか仕事ができなくて困るだろう	5.5	8.2	2.7	6.7	5.0	4.9
Q-8	母だけの生活力		1．今と同じくらいの生活ができるだろう	22.2	22.7	21.6	27.2	23.4	16.0
			2．少し貧しいがなんとかくらせるだろう	70.0	67.9	72.3	65.4	68.9	75.7
			3．家族の生活はひどく苦しくなるだろう	7.8	9.4	6.1	7.4	7.7	8.3
Q-9	十万円の借金	親せきは	1．何げんもありそうだ	39.2	40.0	38.5	34.0	42.3	41.5
			2．1けんぐらいならありそうだ	53.9	51.5	56.2	56.7	50.4	54.2
			3．全然なさそうだ	6.9	8.5	5.3	9.3	7.3	4.3
		友人は	1．何人もありそうだ	21.0	20.7	21.4	18.8	23.4	20.9
			2．1人ぐらいならありそうだ	57.9	5.5	60.5	57.3	57.2	59.2
			3．全然なさそうだ	21.1	23.8	18.1	23.9	19.4	19.9
Q-10	百万円の借金	親せきは	1．何げんもありそうだ	6.0	5.3	6.8	7.9	4.5	5.7
			2．1けんぐらいならありそうだ	50.9	49.0	52.9	44.4	55.0	53.3
			3．全然なさそうだ	43.1	45.7	40.3	47.7	40.5	41.0

	質問項目			全体	性別		学年別		
					男子	女子	4年	5年	6年
Q-10	百万円の借金	友人は	1．何人もありそうだ	2.8	3.0	2.6	3.5	2.4	2.5
			2．1人ぐらいならありそうだ	28.9	29.0	28.8	28.3	31.0	27.4
			3．全然なさそうだ	68.3	68.0	68.6	68.2	66.6	70.1
Q-11	の生活力	老後の両親	1．貯金、恩給でくらしていけるだろう	34.8	34.5	35.2	38.1	35.3	31.2
			2．毎月少しお金をあげればくらせるだろう	54.9	53.7	56.0	50.2	56.0	58.2
			3．全部両親の生活をみなくてはならないだろう	10.3	11.8	8.8	11.7	8.7	10.6
Q-12	現在の裕福度		1．とても豊か	3.5	3.8	3.1	4.5	3.6	2.3
			2．わりと豊か	18.8	21.1	16.4	21.2	17.8	17.4
			3．ふつうぐらい	70.3	67.3	73.6	67.6	71.7	71.7
			4．あまり豊かでない	6.4	6.6	6.2	5.6	5.8	7.8
			5．全然豊かでない	1.0	1.2	0.7	1.1	1.1	0.8
Q-13	将来の裕福度		1．今よりずっとお金持ちだろう	5.0	7.3	2.7	6.1	4.3	4.7
			2．今よりややお金持ちだろう	30.5	32.1	28.9	32.0	31.6	27.9
			3．今と同じぐらいだろう	56.2	51.7	60.8	53.5	56.8	58.2
			4．今よりちょっと貧乏だろう	7.4	7.9	6.9	7.5	6.0	8.7
			5．今よりかなり貧乏だろう	0.9	1.0	0.7	0.9	1.3	0.5
Q-14	自立後の裕福度		1．今よりずっとお金持ちだろう	6.4	8.7	4.0	8.0	5.8	5.3
			2．今よりややお金持ちだろう	30.7	30.6	30.8	31.3	30.6	30.1
			3．今と同じぐらいだろう	57.0	53.2	61.0	55.2	57.6	58.5
			4．今よりちょっと貧乏だろう	5.5	7.1	3.8	4.9	5.7	5.8
			5．今よりかなり貧乏だろう	0.4	0.4	0.4	0.6	0.3	0.3
Q-15	母の職業		1．主　婦	49.6	46.9	52.5	46.8	49.4	52.7
			2．毎日おつとめしている	27.0	27.7	26.3	27.2	25.6	28.2
			3．自分の家の仕事を手伝っている	14.5	14.8	14.1	13.9	15.1	14.4
			4．その他	8.9	10.6	7.1	12.1	9.9	4.7
Q-16	勉強への自信		1．とても得意	3.2	4.6	1.7	4.0	2.7	2.7
			2．わりと得意	13.8	16.6	10.8	13.6	12.6	15.0
			3．ふつう	52.0	46.7	57.6	54.0	51.9	50.4
			4．わりと苦手	21.9	21.1	22.8	20.2	22.4	23.2
			5．とても苦手	9.1	11.0	7.1	8.2	10.4	8.7
Q-17	自分の貯金	貯金の有無	1．貯金をしていない	16.1	18.3	13.7	16.4	15.5	16.3
			2．貯金をしている	83.9	81.7	86.3	83.6	84.5	83.7
		貯金額	1．0～10,000円	18.5	19.5	16.9	24.7	14.9	15.4
			2．10,001～20,000円	12.9	11.6	14.9	12.1	13.4	13.8
			3．20,001～30,000円	9.9	10.1	10.2	8.6	12.0	9.7
			4．30,001～40,000円	6.6	6.6	5.9	6.4	5.9	6.9
			5．40,001～50,000円	10.4	12.0	9.2	7.7	11.2	12.4
			6．50,001～60,000円	5.7	6.6	4.9	5.9	5.1	6.2
			7．60,001～70,000円	4.4	4.6	4.5	3.5	4.2	5.8
			8．70,001～80,000円	4.0	3.5	4.4	3.7	4.0	4.0
			9．80,001～90,000円	2.1	2.2	1.7	1.5	3.3	1.5
			10．90,001～100,000円	8.4	7.3	10.2	9.8	7.4	8.2
			11．100,001～200,000円	10.4	10.5	10.7	9.1	11.8	10.6
			12．200,001～300,000円	3.0	2.2	3.1	2.8	2.5	3.2
			13．300,001～400,000円	0.7	0.4	0.8	0.8	0.6	0.8
			14．400,001～500,000円	1.0	1.0	0.9	1.1	0.8	0.9
			15．500,001～1,000,000円	2.0	1.9	1.7	2.3	2.9	0.6

● 資料3　職業分類(子ども用)*

1．専門管理職

大学教師・弁護士・医師・重役以上の管理職・国会議員・市長・科学者・政治家・建築家（ビルなどの)・会計士など

2．セミ専門職

記者・神主・技師(エンジニア)・パイロット・大きな船の船長・設計士・税理士・通訳・獣医・刑事など

3．技能職[**]

理容師・美容師・タイピスト・消防夫・大工・キーパンチャー・看護婦・歯科衛生士・職人・コック・生け花やお茶の先生・自動車修理工など

4．教　職

幼稚園・小学校・中学校・高校の教師・保母など

5．事務職

サラリーマン・銀行員・ＯＬ・秘書・公務員・警官など

6．販売生産労働

セールスマン・運転手・店員・工場労働者・漁師など

7．自　営

農業・小売店主・小規模工場主など

8．タレント・芸術家

マンガ家・ピアニスト・作家・歌手・スポーツ選手・デザイナー・スチュワーデスなど

9．その他

＊ 子どものイメージを尊重した分類で、必ずしもおとなの場合と一致しないものも含まれる。

＊＊技術のマスターが必要で、多くは個人的に仕事する。